

33 力国リレー通信

<第10回> ニカラグア

遠ざかる「国民の和解と団結」
～オルテガ政権の2年半を振り返る～

丸橋 重友

近年ラテンアメリカにおいて左派政治勢力の台頭が顕著となるなか、ニカラグアでは2007年1月に、貧困・社会格差の改善、国民の和解と団結、国民参加型民主主義を掲げ、過去16年間のリベラル政権からの変革を目指すサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)のダニエル・オルテガが17年振り大統領に返り咲いた。

合法的に誕生した政権とはいえ、得票率38%で当選した言わば国民の過半数の支持を得ていないオルテガ政権にとって、最大の課題は多数派であるリベラル派層の取り込みであった。オルテガ大統領は自らの政府を「国民の和解と団結の政府」と位置づけ、国民対話を推進する構えを見せたが、大統領夫妻とその側近への集権化が進み、オルテガ政権が憲法・法律を蔑ろにした権威主義的な政治姿勢を強めたことや、公務員の雇用、貧困対策プログラム、ベネズエラの援助を巡ってFSLNのクライエンティリズムが横行したことに対して国民の不満が一気に高まり、政権発足当初に61%を記録したオルテガ大統領の支持率はわずか半年後には26%にまで低下した。その後もオルテガ大統領の政治姿勢に大きな変化はみられず、現在も大統領支持率は25%前後で推移している。

● 人民権評議会の設立

サンディニスタ派と反サンディニスタの

対立が次第に深まる中、オルテガ大統領は2007年12月、「エル・プエブロ・プレシデンテ（国民こそが大統領）」をスローガンに「人民権評議会（CPC）」を発足させた。ムリージョ大統領夫人は CPCについて「コミュニティーから国に至る各レベルでの公共政策の策定等における国民の参加促進が目的であり、各コミュニティー・区・市・県の CPC から吸い上げられた提案・要望は、大統領、閣僚、各県評議員から構成される国民内閣を通じて国政に反映される」と説明した。オルテガ大統領は CPC が全ての国民に開かれた組織であることを強調し、反サンディニスタ派の参加を呼びかけたが、野党・市民団体は、オルテガ大統領の狙いは1980年代に反体制活動の監視を目的としてキューバの革命防衛委員会をモデルに導入された「サンディニスタ防衛委員会（CDS）」を復活させることにあり、CPC 設立の真の目的はオルテガ政権による「統治の強化」、「国民のコントロール」、「選挙基盤の確立」にあるとしてその導入に反対した。また、2008年8月の世論調査における 12.4% という FSLN 支持者の CPC 参加率が示すように、CPC の導入はクライエンティリズムの恩恵を受けられない末端の FSLN 支持者の不満を煽っただけでなく、既得権益が奪われることを懸念する既存の FSLN 系の非営利組織・市民団体との間で主導権争いを発生させるなど、FSLN 内部に

も大きな亀裂を生じさせた。

● 統一市長選挙

2008年11月に全国146市で行われた統一市長選挙は、オルテガ政権発足後初の全国レベルの選挙であり、同政権に対する国民の信任度を測る意味からも注目されたが、選挙監視も認められず、極めて不透明なプロセスの結果、選挙はFSLNの圧勝（105市で勝利）に終わった。これに対して野党・市民団体は最高選管及びFSLNによる組織的な不正を指摘し、選挙の無効を訴えて全国で大規模な抗議デモを実施した。反サンディニスタ派の不満は投石や放火等の暴力に発展したが、これをFSLN支持者が暴力で押さえ込もうとしたため、全国で大規模な衝突が繰り返された。選挙後、EU諸国は選挙プロセスにおける透明性・公正性の欠如を理由にオルテガ政権に対する財政支援の凍結を表明したほか、米国はミレニアム挑戦会計（MCA）による対ニカラグア支援を凍結した。

● FSLNとリベラル派の動向

オルテガ政権発足直後よりFSLN内部では大統領の連続再選に向けた憲法改正が唱えられてきたが、FSLNが統一市長選挙で圧勝したこと、2009年下半期以降、憲法改正議論が活発化することが予測される。しかし、国会少数派であるFSLNが憲法改正を実現するためには野党の協力が不可欠であり、今後与野党間の政治的駆け引きが活発化すると見られる。既に大統領連続再選の代替案として議院内閣制の導入による首相ポストの新設をはじめ、歴代大統領に対する永久議員職の供与等、オルテガ大統領とアレマン元大統領による水面下での政治取引（パクト）の継続と政治権力の共有が目的とも指摘される憲法改正案が浮上している。憲法改正を実現できな

かった場合、FSLN内部でオルテガ大統領の後継者争いが発生する可能性も否定し得ない。オルテガ政権の発足から統一市長選挙に至る過程において、ニカラグア国内では「オルテガ派」または「オルテガ支持者」を意味する「オルテギスタ」という言葉が頻繁に使用されるようになった。反サンディニスタ派は専ら「オルテガ大統領に忠実なCPCメンバー」に対してこの言葉を使用しているが、これはCPCがFSLNの組織ではなく「オルテガ大統領の個人的組織」と見なされているということに他ならならない。「サンディニスタ」と「オルテギスタ」の使い分けは一般化されつつあり、これは組織力を誇ったFSLNが既に一枚岩ではなくなりつつあることを物語っている。

一方のリベラル派内では、2006年大統領選挙での統一候補の擁立失敗がオルテガ政権を発足させてしまったとの反省から、立憲自由党（PLC）及び独立自由党（PLI）を中心に、2011年大統領選での統一候補の選出に向けた調整が行われている。リベラル派統合の鍵を握るのは名誉党首として未だPLC内で絶大な影響力を有するアルノルド・アレマン元大統領と伝統的な頭領（カウディージョ）政治とパクトからの脱却を掲げ、リベラル派支持層から高い支持を得ているエドワルド・モンテアレグレ議員である。両者は統一市長選挙プロセスにて一旦は協力を表明したものの、選挙結果を巡る立場の相違から対立し、モンテアレグレ議員に至っては統一市長選におけるアレマン元大統領との協力が過ちであったとして、アレマン元大統領との一切の協力を拒否する構えを示しており、リベラル派の統合は難航すると見られる。

（まるはし・しげとも 在エルサルバドル大使館書記官、前ニカラグア大使館専門調査員）